

熊本・徳永直の会会報

第49号

盛大裏に終る第二十八回孟宗忌

第二十八回孟宗忌は、二月十二日（土）に開催した。碑前祭には昨年を大きく上回る参加者があった。今回は宮城から金野文彦佐藤三千夫記念会事務局長も参加し、直接本人からメッセージも読み上げられた。あとは例年通りのお祭をして会場を移動した。

熊本近代文学館との共催は、定着した感がある。講話と朗読の会場は、熊本近代文学館正面ロビーで、午後一時三十分から久野啓介館長の挨拶に始まり、金野氏の『日本人サトウ』についての講話、熊本朗読研究会による『日本人サトウ』の部分朗読があった。朗読研究会の予定メンバーの一人が、急に出場できなくなり困っていたところ、たまたま帰熊しておられた作曲家の岩代浩一氏が、飛び入り朗読をしてくださった。聴衆は思いがけない大物出演に大喜びであった。

偲ぶ会も例年通り、電車通りの水前寺十徳屋で開いた。こちらは予定より少なく一寸寂しいことであった。来年も同様形式でやるつもりである。偲ぶ会も同場所になるだろう。偲ぶ会だが、なかなかおもしろい話、ためになる話も出るのだから、多くの参加者をお願いしたい。



講話する金野文彦氏



碑前祭に集まった人々

故木庭克敏氏特集



徳永直二女 津田道代さん撮影

↑
木庭克敏さん

肥後の黒土と木庭さん

千葉 昌秋

木庭克敏さん

熊本駅の先の田崎陸橋のきわ、小じんまりしたあなたの家を訪ねて行ったのは、たしか四十年ほど前だったと思います。文芸サークル発足についての打ち合わせでしたが、それがあなたにお会いした最初でした。

暖かな笑顔、まじり気のない肥後弁、おだやかな話しぶりが、その折の印象でした。それは今も全く変わっていません。少し引きずり勝ちな言葉づかいが話題の広がりにつれて熱を帯びてくる。木庭さんの話には抱擁力があり、うん、うんとうなずかせる重みがあった。時を忘れてしゃべり合った楽しい思い出が浮かびます。

徳永直文学碑建設の計画が持ち上がると、あなたはすすんで実行に加わった。故高光義明さんのめざましい活躍は今も胸に鮮やかですが、木庭さんの姿はいつも活動の輪の中にありました。孟宗忌の集いでは、あなたは会費あつめを引き受けていました。前日には「献花の花束を必ず用意してくれ」と電話がかかってきました。うっかり者の私を気づかっただけのことでしょう。「誠実」という言葉がびつたりの木庭さんでした。

徳永直が故郷の熊本を愛したように、木庭さん、あなたもこの熊本の地をこよなく愛した人でした。あなたは生前の三冊の詩集を世に出しました。そのなかで、あなたは次のようにうたっています。

熊本駅に降りると

ばあつと 眼の前にひろがる黒土
阿蘇のマグマがちんちんに打ちわられて
白川の流れに運ばれてきた黒土
お前ば ぎゅつと握りしむると
じゆるじゆると養分がにじみ出す
・・・

(詩画集「黒土の地」から)

徳永直を生み、そして育てた熊本の黒土。その黒土に、いまあなたは眠っています。

木庭克敏さん。私たちも熊本の黒土をしつかりと足で踏みしめて、あなたとともに歩みをすすめます。(二〇〇五年三月二十四日)

木庭克敏さん

宮崎 静 夫

寒い日であった。もうずいぶん以前の孟宗忌の日のことだった。熊大前のバス停から、徳永直文学碑のある立田山の方へ歩き出すと、前方に遠く木庭克敏さんらしきうしろ姿があった。そのときの背をくぐめ心なしか元気の無い様子が、何故かいまも妙に心に残っている。

木庭さんと会ったのは、もう四十数年も前のことで、熊本市上通町にあつた熊日画廊で、初めてそれらしき個展を開いたときだった。若い見知らぬ男が二人、丁寧に作品を観ていたが、遠慮がちに私の作品が欲しいという。当時私は、市の失業対策事業で働く人々の姿を連作していたが、およそそれらは部屋に飾ることを目的とした

ものではなかつた。だが二人は真剣に選んだのち、それぞれ二〇号の「群婦」と「トラックの人々」という作品を指定してくれた。

そのとき私は、木庭克敏・岩下恵治の両氏を知り、二人は共にRKK熊本放送に勤める俊英であることも知った。

二人との交友はそれ以来続いたが、木庭さんは、高校生のころ海老原美術研究所に籍を置いたこともあつたとかで、美術への関心もあり、学生時代には文学を専攻、詩人でもあつた。

木庭さんは何冊かの詩集を出しているが、一九五三年に出した処女詩集のあとがきに、「…訥弁であつても働く人々に語りかけるような詩集をあもうと心に決めました。」と。これは八一年に出版した私の詩画集「黒土の地」に寄せた詩友藤坂信子氏の文の中にあつた。寡黙な木庭さんから聴くことはなかつたが、それで最初の出会いでいきなり私の作品を買求めた木庭さんの心の内を諒解することができた。

詩人であり、放送局という先端の職場にありながら、訥々とした木庭さんはおよそ洒落男ではなかつた。反権力の激しい詩も書いたが、人にはやさしく、世話好きでもあつた。人生の祝い事などにあまり頓着しない私のために、頼みもしないのに親しい人達に呼びかけて還暦の集いを開いてくれたこともあつた。また、私の画集のために英文の翻訳を学友だった元熊本女子大教授田中啓介氏へ頼んでくれたこともあつた。

いま私は、木庭さんがその晩年、体調を毀し人前に姿を見せなくなつてからは、木庭さんに何程のことをして来たのか、忸怩たる思いをどうすることもできない。そして、あの徳永直の碑へ向かう木庭さんの背を、また思い出している。(二〇〇五・三・二七記)

『木庭克敏さんのどもり』

『イイツ坂井さんがパツ・パリに絵のベツ・勉強に行かすけん、ああたも絵ばコ・買うてくれんね』木庭さんの弁は熱が入るほど、どもりが強くなる。しかし、このどもりが曲者だ。

詩人・木庭克敏の言葉がどもりで中断する度に、次に爆発して出て来る言葉をハラハラしながら身構えて待つのである。それは丁度話家の間のように人を引き込んでしまう不思議な力を持っている。木庭さんの熱情ある話術によつて板井榮雄さんの絵は沢山売れたようである。

今、我ヶ家にある板井さんの絵を見ている。木庭さんや自分の三〇年前の青春が甦えつつくるようである。

(友人 岡松宏泰)

『木庭克敏さんの詩』

「爪をたてち ガリガリ壁ばひっかいて

僕自身ば なんとか刻みつけんば

どぎゃんもならんと・・・」

厄年のとき木庭さんはこう詠っている。

あの人は、弱いもののために自分が傷ついても何とかしないと落ちて着けなかった。

たまたま職場で共に働いたときのあの人の眼の中に、幾度となく

その真摯な輝きを見たことか。訥弁であつたがゆえにその思いは深い。

居酒屋「それから」で杯を共にするときもあの人はあまり笑おうとはしなかつた気がする。常に壁に自らを刻みつけ爪から血を流しつつつけていたにちがいない。

終焉の時あの人は冷静に後処理を示したと聞く。それはひとまずの達成感からなのか、はたまたまだ汗を流さねばならないことの多さと苛立ちを、残された者達へ告げようとしたのか、いまでは哀しいかな聞くすべもない。

「・・・どこん、誰が、どぎゃん、うつろいやすく散りやすく、死にいそぎする花ば植えたつか。」

あの人の「桜散る」。好きな詩である。

(元同僚 和田正隆)



右端撮影者、右から4人目木庭さん
岡松宏泰氏提供

『木庭克敏君を思う』

平成十三年四月初旬の事と思うが木庭君から電話があり、「中央病院に入院したので来てくれないか」とのこと、どうも肺に影があり少々あやしいものらしいと興奮気味に話しかけてきた。数日後見舞いに行きこれ迄の病気の経過を聞かされた。当初は右肩付近にコブができ次第に大きくなり腰も痛くなり歩行もできないとのこと、全身の検査の結果胸部にも小さな影が数多く発見されたという内容であった。しかし悪性ではなかったので一安心したとの事、私もそれを聞きやれやれと思いつつも一抹の不安は残った。しかし彼の口から遺産相続の内容を聞かされたとき、彼はすでにガンであることを知っていたのではないかと直感した。

後日、奥様と長男の恵一郎君、長女の奈緒美さんからガンであること、しかも余命僅かと聞かされ、やはり思いは当ってしまったと現実のきびしさを思い知らされた。

酒は少ししか飲まないタイプでありタバコは全くやらないそんな人間が皮肉にも何故ガンになってしまふのか？神や仏がこの世に存在し人間をやさしく見守ってくれるものとの思いも怒りに変り呪いたくもなってしまった。今年一月二日奥様よりすでに昨年十二月にホスピスに入院したこと、そして今はすでに危篤状態になっていることを電話で聞かされたとき来るべき時が来たのだ、今は声をかけはげますことしか私には出来ないとの思いで病院に通った。そして一月十二日、私の励ましの声にも反応せず息絶え永遠の別れとなってしまった。

四十九日も終り仏壇の遺影の前にして奥様と生前の彼の思い出を話すと思ひ出多く、悲しみがこみ上げて来るの禁じ得ない。

附小附中、濟々巒時代、RKK入社当時の慶びと希望に満ちた顔を忘れる事はないだろう。正義感が強く何事にも前向きに勇気をもつて堂々と生きた木庭克敏君、ありがとう。彼は良き相談相手であり心のささえであり知恵を示唆してくれた親友だった。今はただ冥福を祈るばかりだ。
(友人 粟田嘉郎)

木庭さんを偲んで

木庭さんの事を同級生の誼で私は「木庭ちゃん」の愛称で呼んでいた。とは云つても、高校時代のことをあまり知らない。一風変わった行動？をする男子という印象しかなかった。友達とつるんで暴れ回るとか、授業をサボるとかすることもなく、静かだった。と思つていたが、後日ある会合で、それなりの青春を楽しんでいたらしいと聞いた。就業時代についても、その仕事振りとかあまり知らない。ただ噂の範囲を伝え知る位だった。しかし、ある事をきっかけに地味であるけれど、何かしら光るものを秘めている人だと、感じるようになった。それは私がある商売を始めるようになってからの事で、気配りのある助力をいただくようになってからの事だ。画家、詩人、報道関係等の方々と広い交流、又知識を充分に持ち、活躍しておられる人だと知つてからだ。失礼かもしれないが、当時その種の会合に同席するのは、商売上の一環と軽く考えていた。しかし、その人間性に段々と強くひかれて行つた。何時からそれ等の知識を身につけられたのかと驚くばかりだった。種々のその方面へ

の興味を私なりに持ち、影響を受けていったと思う。そして楽しかった。退職されてからの木庭ちゃんは今後仕事をやる上で、どうしても車の免許が欲しいから普通の人の倍の時間と費用をはらったよ。」と笑っていた。しかし奥様に云わせると、「今まで行けなかった所へも、ずいぶん行ったけど、車庫入れが、下手ですもんね。」と苦笑してらしたので、その後の修理代も多かったのでは…？それまでと違った企画の仕事を行動的に始めて、白塗の看板を自宅に掲げられ、楽しそうだった。家もまあ近かったし、自宅で療養生活を送られるようになってからは、折にふれお伺いした。回りからの伝言もあり、「今の心境を詩に書いてみたら。」と進めたが、多くを語らず、「こんな体になって、運命だよ。」と意欲的な言葉は聞けなかった。「将来ある文系の方々の才能を見出し、育てていけたら。」と聞いたことがある。「段々と失われようとしているその種のものを助けたい。」ともつぶやいておられた。病に倒れ手がとどかなくなった「夢」を思いイライラされる様子もたまに伺えた。でもその反面ある種の企画は今でもその意志を受けつぎ、現在も確実に動き、成果を上げていると思う。あの風格からして、多くを語らず、威張りもせず、媚もせず、自然体で生きる事をモットーにしていたらし木庭ちゃんを失った事は本当に残念で仕方がない。その分御家族はその成果を見守られ、話題にされて良いと思う。私も残りの生活を過す上で、去られてしまった事は、実に寂しく残念で仕方がない。しかし私なりに、影響を受けたものをそれなりに今後は楽しみたいと思っている。いろいろありがとう木庭ちゃん。

(友人 福永俱子)

会報第50号いよいよ発刊へ

第49号が出ないことには、第50号は出せない。その第49号が出たとなると、もうあとは第50号である。前号でもお知らせしたように、第50号は小冊子にしたい。編集委員からお願いする人もいようが、とにかく会員のみなさんお一人一人が、積極的に投稿していただくことを期待する。近ごろ新聞など見ていると、全く文学とは縁のないように思える人が、結構ユーモアもある読みごたえのある文章を書いておられる。そんな肩のはらない作品も本会報には欲しい。

原稿締め切りは十月末日。枚数は問わないとは言え、多くの人に書いてもらいたいのので、長くて十枚程度までにしていただければありがたい。いろんなお問い合わせは事務局まで。

事務局だより

▽孟宗忌が終わったらすぐ第49号を出す予告していたが、三月四月も過ぎてしまった。今号は故木庭克敏氏の追悼号にしたいと言い、早くから呼びかけに応じていただいた方々に、発行が遅れたことをお詫びしたい。

▽第50号記念特集号は、編集委員会を作りたい。われこそはと、ボランティアを申し出られることを切望している。

▽そして何より原稿が欲しい。

熊本・徳永直の会 熊本市北千反畑町五―一三 さろん・ど・漱雲
 〒八六〇―〇八五五 TEL・FAX〇九六―三四三―〇〇七二
 郵便振替 〇一九四〇―二―一四九八